博士論文

ジル・ドゥルーズの哲学と芸術

—ノヴァ・フィグラ—

La philosophie de Gilles Deleuze et l'art

— *Nova Figura* —

黒木　秀房

目次

序論　哲学的表現の問題　7
1. ドゥルーズ的「自由間接話法」　9
2. フィギュールの問題圏　21
3. 本論の意義　24
4. 本論の構成　26

第 I 部　哲学と芸術をつなぐもの　29
第 1 章　「翻訳」の問題　33
1. 「翻訳」の創造性　34
2. 母国語の外国語化　40
3. 「異邦なものになること」としてのマイナー性　44
4. 翻訳者ドゥルーズ　47

第 2 章　倫理論　54
1. モラルとエチカ　55
2. 構成主義的パースペクティヴ　58
3. コーパスと共同体　63
4. 「抵抗」としての生の美学　69

第 II 部　エチカとフィギュール　75
第 3 章　イメージの問題　79
1. アンチ・ミメーシス的イメージ—差異としてのイメージと「ドラマ化」の方法　81
2. イメージと図式論　86
3. 「見ることは話すことではない」　89
4. 言語におけるイメージの効果　98

第 4 章　フィギュールとは何か　102
1　フィギュールが表現するもの　102
2.　フィギュールの生成過程　109
3.　変換のシーニュとしてのフィギュール　116
4.　文学におけるフィギュール　121

第 5 章　主体化のプロセス　125
1.　フーコーを読むドゥルーズ—「知」と「権力」　125
2.　「人間の死」　130
3.　「主体化」と芸術作品としての生　133
4.　襞とは何か　138

第Ⅲ部　フィギュールの共同体　147
第 6 章　「来るべき民衆」の政治性　151
1.　民衆の欠如　152
2.　新たな政治的イメージ　155
3.　民衆の欠如への抵抗とは何か　159
4.　民衆の創出におけるフィギュールの役割　164

第 7 章　創造の共同体　169
1.　防衛機制としての「仮構作用」　169
2.　モニュメントとしての芸術　174
3.　「仲介者」の役割　180
4.　フィギュールと単独者　185

結論　新たな思考のフィギュール　189

参考文献　199

Résumé de la thèse　213

要約

本論の目的は、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズの哲学的表現の特異性を、ドゥルーズ哲学と芸術の関係性を分析しながら、明らかにすることにある。ニーチェ以来、多くの哲学者がスタイルの問題を様々なかたちで取り上げてきた。とりわけ、20 世紀後半の哲学者たちは、この問題を芸術的創造に引きつけて考察し、理論と実践の両面から実験的な試みを行ってきた。だがその一方で、思考とその表現の多様性は、哲学が哲学であることの本質を見失うことになると指摘されることもしばしばある。にもかかわらず、なぜ哲学者はスタイルの刷新へと邁進するのであろうか。今日、このような問いは、哲学を行う上でますます重要かつ不可欠なものとなっている。

ところで、ドゥルーズもまた、芸術との出会いを通して独自の哲学を練り上げていった哲学者である。ドゥルーズ哲学の魅力を端的に言い表すならば、周縁のものを巻き込みながら自らの思考を螺旋を描くように掘り下げていく、いわばトリックスター的とも言えるようなその異邦性であり、言語の厳密な論理的使用から哲学を解放し、ある種の創造行為として再提示した点にあったのではないだろうか。ドゥルーズの哲学的スタイルについては、これまで「自由間接話法」という文学的修辞技法のタームが用いられることが多かった。しかしながら、スタイルに関するドゥルーズの思考と芸術論を丹念に読み込むならば、ある一つの文体的特徴だけをもってドゥルーズの哲学的表現の特異性とすることは難しいことがわかる。

そこで本論では、ドゥルーズの著作群の中でもとりわけ芸術作品に多くの言及があり、イメージの問題について論じたとされる後期ドゥルーズの著作を主に取り扱い、これらの著作において頻出する「フィギュール」という語に注目しながら、まさにこの語のうちにドゥルーズの哲学的表現の理論的・実践的探求が結晶していることを示したい。

本論は 3 部 7 章構成からなる。第 1 部（第 1、2 章）では、フィギュールの重要性を明らかにするための予備的な考察として、スタイルの問題に関するドゥルーズの思考を美学的・倫理的側面から検討する。第 2 部（第 3、4、5 章）では、さまざまなコンテクストで用いられるこの語を一つ一つ分析し、フィギュールが孕む問題系を包括的に扱う。第 3 部（第 6、7 章）では、ドゥルーズにおける哲学と芸術の共通の目的を共同体の創出と措定し、ドゥルーズ的共同体創出プロセスにおける「フィギュール」の位置づけを検討しながら、その射程を図る。

第 1 章では、ドゥルーズ哲学の芸術へのアプローチを考察する。そのためにこのアプロ

ーチを広義の「翻訳」と措定しながら、二つの文学論『プルーストとシーニュ』、『カフカ』を中心に取り上げ、ドゥルーズにおいて芸術は哲学の刷新のために喚起されるものであることを示す。ドゥルーズにおいて芸術は、哲学の説明や例示としてではなく、哲学を再創造するために用いられる。ドゥルーズが芸術のうちに見出すのは、単なるコミュニケーションとは異なる、創造のモチーフとしての翻訳である。この意味において翻訳が孕むのは、言語行為の問題ではなく、「異邦なものとしてある」という存在様態の問題でもある。そこで、「マイナー性」というドゥルーズの概念を分析しながら、翻訳を介して異邦なものになるということの効果について考察する。最終的に、芸術作品の哲学的思考への翻訳こそが、ドゥルーズ哲学の根幹にあることを指摘する。

第 2 章では、ドゥルーズにおける哲学と芸術が共有する問題連関を明らかにする。そのために、ドゥルーズにおける倫理的思考の基盤が構成主義的パースペクティヴにあることを示すことで、芸術と共闘するドゥルーズのエチカが最終的に共同体の問題へと向かっていくことを明らかにする。構成主義的パースペクティヴとは、自然を内容と形式の二元論的枠組みではなく、力と力の関係として捉えることである。これらの点を指摘することで明晰に浮かび上がってくるのは、ドゥルーズにおける「身体」と「共同体」の問題連関である。両者が共通の語源 *corpus* に由来することから、何らかの共通点があることを容易に想像することができるが、ドゥルーズにおいては、このコーパスの捉え方こそが両者を貫く一つの問題を構成しており、まさにこの点において、倫理と美学が通底していることを示す。

第 3 章では、フィギュールが定位されることになるイメージの問題を扱う。そのために、イメージの問題がドゥルーズ哲学においてどのように提起されているのか見ていく。とりわけ、「ドラマ化」という概念創造に関する方法概念とフィギュラティフ／フィギュラルというリオタールに由来する概念的二分法に着目することで、ドゥルーズ哲学が単に言語の論理的使用ではなく、むしろイメージを媒介とした概念創造に基づいている点、ならびにドゥルーズ哲学におけるイメージの重要性を明らかにする。その上でカント的図式論との比較を通して浮かび上がってくる、ある特殊なイメージとしてのフィギュールとその独自性をあぶり出し、翻ってこのフィギュールがイメージと言語の新たな関係性を示す可能性も見る。

第 4 章では、フィギュールの内実を探る。そのために、「フィギュール」という語が使用されるドゥルーズの芸術論を一つずつ取り上げながら、その間に潜む一貫性を浮かび上がらせる。そこで、まずはこの語がもっとも頻出する『感覚の論理学』を詳細に分析することで、フィギュールの現出は、純粋に視覚的な経験であることを指摘する。タブロー上の

イメージはその経験の結果として産出されるものであって、フィギュールそれ自体が示すのはある変換のプロセスそのものである。このように理解することで、『シネマ』におけるフィギュールとの関係性が浮かび上がってくる。フィギュールは今や、単にフィギュラティフなものからフィギュラルなものへの昇華だけでなく、見ることの体制の変換を示すものである。このようなフィギュールがもたらす認識の転換こそが、『批評と臨床』に収められるバートルビー論においてドゥルーズが展開しようとしたことでもあることを、バートルビーが放つ奇妙な言表行為と存在様態の連関を分析しながら明らかにする。

第 5 章では、フィギュールと結びつく哲学の問題を明らかにする。そのために、一見するとイメージとは関係のないように見える『フーコー』と『襞』をとりあげながら、フィギュールの根底にある倫理的な問いを分析する。まずは、フーコーが批判し、ドゥルーズが強調していたのが、現実の人間ではなく、「人間」という概念ですらなく、概念の裏地としての人間のイメージであることに着目する。つまり、フーコーを解釈しながらドゥルーズが展開する新たな主体性とは、概念の前提となっているイメージをぬぐい去り、新たなイメージを打ち立てることに他ならない。しかしながら、イメージ（モデル）なき美学をわれわれはどのように生きることができるのか。このような問いが『フーコー』に続く『襞』という書物の根底に連なっているのではないか。というのも、多種多様で流動的な生が一つのスタイルを持つのだとすれば、そこで問題となるのは、一に還元される多、あるいは多に分割される一とは異なる新たな＜一＞と＜多＞の関係性であるからである。このような論点が『襞』ではアレゴリーの関係として展開されていることを示し、まさに＜一＞と＜多＞を関連づける蝶番となるのがフィギュールであることを明らかにする。

第 6 章では、ドゥルーズ的共同体におけるフィギュールの役割がいかなるものなのかを明らかにする。そのために、まずは「来るべき民衆」という表現を分析する。だが、「来るべき民衆」とは哲学的投企であるがゆえに、それが表現するものを問うことはできない。そこでまずは民衆の欠如とはいかなる状態なのか分析することから始める。すると、ドゥルーズが念頭に置いていたのは、単に大衆イメージの欠如ではなく、民衆の抹消であることがわかる。つまり、ドゥルーズは、そこに民衆が実在しているにもかかわらず、いないものとして振る舞うことこそを問題化しているのだ。それゆえドゥルーズの政治的争点は、政治システムの転倒ではなく、この状況の開示であり、抹消への抵抗である。そこで、この状況の不可視性の可視化こそがフィギュールの役割であり、ドゥルーズ的共同体とはこのフィギュールを介して民衆の欠如から創出への変換することからなることを示す。

第 7 章では、ドゥルーズ的共同体におけるフィギュールはどのように機能するのかを明らかにする。そのために「仮構作用」という概念を巡るドゥルーズの言説に注目する。も

ともとベルクソンの概念であったこの仮構作用は、知解不可能な現実に対するある種の防衛機制としての人間の能力を指すものであった。ドゥルーズはこの仮構作用に、単に表象の復元ではなく、既存の知のシステムを避けるための機能を積極的に読み込んでいる。芸術家と哲学者の呼びかけに民衆が応答することで仮構作用が作動するのだが、その際に媒介となるのがドゥルーズが「モニュメント」と呼んだものであることを示す。その上で「仲介者」という概念の分析を経由することで、まさにフィギュールがモニュメンタルな超越論的感覚存在であり、これを媒介とする独自存在の共同体こそがドゥルーズ的共同体であることを明らかにする。

結論では、以上の議論を総括した上で、ドゥルーズの哲学的布置におけるフィギュールの位置づけを確認した。ドゥルーズは、取り組んだ問題の困難さに直面して、その都度文体を変えながら、それでもなお哲学を続けた。ドゥルーズの修辞技法の一貫性を捉えることは難しいが、それでも哲学の外にある種の統一性を見出すことは不可能ではないように思われる。じっさい、シニフィアンなきシーニュとしてのフィギュールが示すのは、哲学の外であり、それを軸に旋回するようにしてドゥルーズの哲学的思考が展開されていた。フィギュールは、美学的構成要素であるだけでなく、来るべき倫理的実在を考察するために欠かせぬものであり、まさに哲学と芸術の間に位置づけることができる。ドゥルーズ哲学においてフィギュールは、前哲学的思考を暴くものであると同時に、再び哲学を始めるためのトポスであり、哲学を無味乾燥なものではなく、魅力的で開かれたものにするために重要なものであり続けた。